

発達心理学編 児童期

全13巻

監修●東京都立大学名誉教授山下俊郎／愛知学院大学教授依田 新／筑波大学教授高野清純
■時間:各巻 約20分

1 身体・運動の発達

〈指導〉鹿児島大学 島田俊秀

●カラー

身体・運動の発達と精神の発達とは無縁のものであるかのように考えられているが、両者は決して無関係のものではない。特に発達途上にある児童期においては、きわめて密接な関係にある。作品は、まず児童期における身体主要部の計測的側面や内臓等の発達的特質および全身的、部分的運動機能の発達過程を明らかにしていく。さらに身体・運動の精神の発達との相関関係を概観すると同時に、それらの発達を規定している諸要因について解説する。

2 言語表現の発達

〈指導〉お茶の水女子大学 藤永 保

●カラー

幼児の言語表現や言語理解は、しばしば極めて不完全であるにもかかわらず、大人はそれに気づかないことが多い。それは言葉以外の状況の文脈が幼児の言語表現の不足を補っているからである。このような不備は、ある特定の条件を設けて実験してみると明らかになる。日常の幼児の生活を注意深く観察すればいたるところに、氷山の一角を認めることができよう。これらを通じて言語発達の過程や大人の何げない言葉使用への教化過程の一端を明らかにしたい。

3 教授・学習のプロセス

〈指導〉筑波大学 杉原一昭

●カラー

教授・学習のプロセスは、教育目標からでてくる具体的な「ねらい」に沿って教師の側から働きかける教授活動と、その働きかけに応じた子供の側の学習活動を通して学習者を教育目標に近づける過程である。この作品では、典型的な授業場面を取り上げ、教授・学習のプロセスにおける独立変数（教材の配列、子供の反応の求め方など）、交互作用因変数（教師と子供の関係、教師の特性など）、および、従属変数（子供の反応など）を例示し、また、新しい教授法のひとつであるCAIについても考察する。

4 読みのプロセス

〈指導〉筑波大学 福沢周亮

●カラー

読みの発達を映像化するために三つの方法を取り上げた。第一に音読の発達、いわば外からとらえた読みの発達といえよう。第二は文章を読んだときのイメージの発達を取り上げ、同じような内容で表現の異なる文章を材料にSD法を使ってイメージを取り、年差と文章差等を考察する。第三は読解過程の分析、モノログ法を使い、文章を読んでいく過程の分析をする。以上三つの項目から読みのプロセスを描いた。

5 行動問題の診断と治療

〈指導〉 筑波大学 内山喜久雄
信州大学 田上不二夫

●カラー

現在のような過当な競争社会においては、児童間の信頼感、連帯感が薄れ、対人関係に過度な緊張を生じている。このような状況の下で、暴力、登校拒否、緘黙、チックその他の行動問題が増加している。ここでは、問題行動を反社会的問題、非社会的問題、行動習癖上の問題に焦点を合わせ、幾つかの実例に基づいて具体的に取り上げ、行動問題の診断と治療の、理論と実際について考察したものである。

6 達成動機

〈指導〉 京都教育大学 林 保

●カラー

この作品は達成動機とその機能に関する研究を以下の4つの領域について解説を試みたものである。

(1)この動機の測定方法。(2)この動機の強さの個人差が具体的行動をどのように規定するかを、挑危険行動や行動の持続性などの面から探る。(3)この動機と課題の成功、失敗の帰着傾向や未来の目標志向との関係について探る。(4)この動機の育成と家庭のしつけとの関係を探る。最後にATKINSONの理論を、まとめとして紹介する。

7 内発的動機づけ

〈指導〉 筑波大学 高野清純

●カラー

子供は寸時もじっとしていない。次から次へと活動が続ける。また、やじ馬的な好奇心も旺盛である。これらはそれぞれの活動動機、好奇心、認知動機等によって引き起こされた行動である。それらは報酬や後押等によって生ずるものではなく、内部からの力によって引き起こされ方向づけられたものである。この動機は教育上大変有効と考えられる。例えば概念的葛藤や認知的不協和を引き起こして学習に興味を持たせたりする。その他幾つかの事例に基づいて考察しながら描いたものである。

8 社会化の過程

〈指導〉 横浜国立大学 依田 明

●カラー

社会は、それぞれ独自の文化を持っている。文化の中には望ましい行動、望ましくない行動のリスト、望ましい行動の順序などが含まれている。一人前の社会人として社会に受け入れてもらうためには、その社会の文化を身につけなければならない。生まれたばかりの新生児は、社会的に容認された行動はほとんどできない。発達するに従って社会の文化を学習していかなければならない。この過程を社会化と呼ぶ。子供の社会化をおし進めるのは、主として親の役割である。この作品は社会化の過程の基礎を扱い映像化したものである。

9 遊びとけんか

〈指導〉 名古屋大学 大橋正夫

●カラー

7～11歳は、いわゆる具体的操作期に当たり遊びとしては、個人的なものから規則のある遊びへと重点が次第に移ってくる。この作品では、学年によるスポーツ的ゲームの形態の変化、遊びと場所や施設とのかかわり、遊びの治療的機能などを例示しながら、子供の社会的発達の一側面を考察する。次にけんか、これは実際に生起するところを捕えがたいが、怒りの発生や攻撃的行動の社会的学習などの場面を適用してけんかのメカニズムについて描いたものである。

10

集団活動とリーダーシップ

〈指導〉 北海道教育大学 鈴木正義

●カラー

入学時から卒業まで、児童の集団がどのように形成され変化していくかを考察する。例えば入学当初は教師を中心とした集団であり、その後、男女混成の弱い集団が形成され、三・四年生頃には男女の反発分離期間があり、高学年になると同性同士からなる集団凝集度の高い閉鎖的集団化される。これらをソシオメトリーの方法で実際の例を示し、各集団の種類と構造についてのべる。またリーダーシップの問題にもふれ、リーダーがどのような状況下で現れるかを観察し、集団活動とリーダーシップとの関係について幾つかの事例に基づいて描いたものである。

11

道徳性の発達

〈指導〉 日本女子大学 古沢頼雄

●カラー

道徳性、あるいは良心とは、個人が他者の気持ちを直接または間接にそこなうことに対しておこす気づかいであるといえるであろう。子供が道徳性を発達させるためには、他者からの意図的教化が必要であると考えられ、実行されている。しかし、果して、この教え込むという手だてが道徳性の発達にどれだけつながるものであろうか。この作品では、親子関係を道徳性の関連性に焦点を当てながら、その発達過程をさぐり映像化したものである。

12

知能と創造性

〈指導〉 東京工業大学 穂山貞登

●カラー

子供の表現活動（絵と舞踊の創作）と問題解決活動を追いながら、そこに見ることのできる日常的な様式と新奇な試行とを例示し、子供たち自身がこのことに気づくことができるような実験を描く。効果的な様式の発達についての自覚を深めることも大切であるが、見なれた様式にこだわらないことについても努力が必要であることを啓発して、知性の働きの理解を深めたい。知能と創造性とを合わせて考える意図はここにあり、子供自身の様式の変化を映像で提示しようとするものである。

13

個人差

〈指導〉 東京大学 肥田野 直

●カラー

子供の個人差は、一卵性双生児の間でさえ気づかれる。まして学級集団の中には、さまざまな個性を持った子供がいる。そのような例は簡単な問題解決行動についても認められる。それでは、子供の個人差は教育的にどんな意味を持っているであろうか。その例として学習場面における個人差の一側面である熟慮型と衝動型を取り上げ、両者を比較してみる。さらに個人差に応じた指導法についてもこの作品では描かれている。

・お問合せ・お申込みは



有限
会社

博映商事

TEL 092-741-0306 FAX 092-741-6628

〒810-0073 福岡市中央区舞鶴1-3-31-220

【HP】 <http://hakuei-shoji.jp>

【E-Mail】 info@hakuei-shoji.jp